

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館
2025 年度春季企画展

演劇は戦争体験を語り得るのか——戦後 80 年の日本の演劇から——
作品解説集

この解説集は、本展の第 1 章～第 5 章で取り上げた主な演劇作品について説明した補足資料です。

第 1 章 「当事者世代」の戦争演劇

三好十郎『峯の雪』

【出展資料】三好十郎『峯の雪』原稿（年代未詳・推定：1944 年頃） 所蔵：神奈川近代文学館所蔵

本資料は、三好十郎の口述を弟子で劇作家の押川昌一が筆記したものだという。1944 年 10 月 3 日に押川が清書を完了し、翌日三好が補筆した「峯の雪」は、戦時下に書かれた最後の戯曲で、大日本興行協会が既成作家に委嘱した優秀脚本競作の当選作。雑誌『日本演劇』1945 年 2 月号に掲載予定だったが、一篇で全頁数をこえる分量かつ統制下の用紙不足で発表に至らなかった。櫻井書店から刊行を準備していた単行本は空襲により印刷所もろとも焼失。櫻井均の自宅にあった朱入り原稿だけが残った。その後、三好没後に手書きガリ版刷りの『三好十郎著作集』全 63 巻（1960～66 年）が限定出版され、「峯の雪」（第 1 巻収録）は初めて陽の目を見ることになる。

三好十郎『廃墟』

【出展資料】作：三好十郎、演出：八田元夫『廃墟』劇団東演公演ポスター（1969 年）

初出は『世界評論』1947 年 5 月。翌月、櫻井書店から同題で単行本化。1951 年 3 月、一步会（戯曲座）が大映撮影所ホールで石崎一正の演出により初演した。

国民全体が戦争責任を自覚した上で再出発しなければ日本の復興は叶わないと考える歴史学者の柴田欣一郎を軸に、そんな現実が存在しないと父を批判する共産主義者でジャーナリストの長男、被害者意識の強い特攻隊くずれの次男、顔に生々しい戦争の疵痕を残しながらも人間は和解できると信念をもつ次女——彼らの家庭内闘争を通して、戦争責任の所在を問うた作品である。戦時下に掘った床下の防空壕を柴田が自ら埋めようとする幕開きが象徴的だ。

同時代評において、文芸評論家の平田次三郎は「戦争責任の所在、こんどの戦争の意味の追究をこれほど徹底して作品の中で果したものは、ほかにない」（「三好十郎論——現代作家論」『近代文学』1948 年 12 月）と高評した。また、三好十郎が「この作品は私という作家が一番正面き

つて日本の敗戦という事がらに対した作品だと言えるかもしれない」（「あとがき」『三好十郎作品集』第4巻、河出書房、1952年）と述べたように、敗戦後の三好にとって重要な転回点として位置づけることができよう。

三好十郎『その人を知らず』

【出展資料】作：三好十郎、演出：佐々木隆『その人を知らず』劇団文化座公演写真（1948年）

作：三好十郎、演出：八田元夫『その人を知らず』劇団東演公演ポスター・同公演写真（1970年）

初出は『人間』別冊、1948年6月。同月には、劇団文化座が佐々木隆の演出により三越劇場で初演。同年11月に中央公論社から同題で単行本化された。

時計修理屋でクリスチャンの片倉友吉が、信仰ゆえに召集を忌避し、そのまま敗戦を迎える「その人を知らず」は、戦時下に三好十郎が佐々木孝丸夫人から聞いた実話にもとづいている。日中戦争下の1939年1月、第一師団野砲第一聯隊に入隊した明石真人が、聖書の教え——「汝殺すなかれ」に従い、兵器の返上を班長に申し出、不敬・抗命罪で軍法会議にかけられて懲役刑に処せられた、という事件である。

劇中、友吉は信仰に忠実であった一方、家族は非国民を出した家と糾弾され、悲運の道をたどる。敗戦を迎えると一転、友吉は「反戦の英雄」と祭り上げられる。しかし、彼の徹底した平和主義は反動として非難されてしまう。三好十郎は「戦争前から戦争中へかけて、自分が戦争というものに就いて考えたりかんじたりしたいろいろの事に、一気に焼ゴテを当てられて血が吹きだして来たような感じ」（「あとがき」『三好十郎作品集』第2巻、河出書房、1952年）を受けたという。その印象が劇作の創造的源泉となっている。戦前・戦中・戦後と価値観の変動を余儀なくされる世界で、自己を一貫する友吉のありようは、三好の理想像であったのかもしれない。

三好十郎『胎内』

【出展資料】作：三好十郎、演出：鈴木勝秀 青山円形劇場＋ゴーチ・ブラザーズ共同プロデュース『胎内』上演台本（2005年）

『中央公論』1949年4月号と5月号に分載され、同年8月に世界評論社から同題で単行本化（「猿の図」〈『諷刺文学』1947年9月〉を併録）された。初出掲載誌（4月号）の「後記」で編集人の山本英吉が「問題作」と紹介し、劇団文化座の佐々木隆は「作家としての腕だめし的な冒険」とその実験性にふれながらも「失敗」（『劇作家・三好十郎』（『日本演劇』1949年7月）と断じていた。

敗戦から2年後、戦争末期に日本軍が掘った洞窟に3人の男女——闇ブローカーの花岡金吾とその情婦村子、洞窟掘削作業に従事した復員兵の佐山富夫——が閉じこめられ、飢餓状態の果

てに、性的不能に陥っていた佐山の男性器が突如屹立し、新生を暗示する、という筋である。「日本の敗戦を自分という人間がどのように受け取ったか？」に就いての最も総括的具体的な答えがこの作品の内容をなしている」（「あとがき」『三好十郎作品集』第3巻、河出書房、1952年）と三好自身が語っている。

「胎内」は長らく上演の機会に恵まれなかったが、初出から14年後の1963年6月、ドラマ座の第1回試演として俳優座劇場で初演（黒川敏郎・西桂太演出）。三好は1958年に泉下の人となっているから、その舞台を見ることは叶わなかった。その後も上演が重ねられ、今日も舞台に上せられることの多い三好戯曲のひとつである。

なお「廃墟」「猿の図」「その人を知らず」「胎内」は、のちに三好十郎の〈戦後4部作〉とも称される。

三島由紀夫『弱法師』

【出展資料】作：三島由紀夫、演出：寺崎嘉浩・水田晴康『弱法師』（同時上演演目：『班女』）劇団NLT公演ポスター（1965年）

家庭裁判所の一室で、俊徳の親権をめぐる争いが繰り広げられている。5歳のとき東京大空襲で両親とはぐれ、失明した俊徳。その彼をめぐり、生みの親である高安夫妻と、育ての親である川島夫妻が対立する。俊徳は冷酷な態度を崩さず、どちらの夫妻にも厳しい言葉を浴びせる。そして、沈みゆく夕日を受け、戦火の中で目にした「この世のおわりの景色」を語り始める。俊徳による最後の一言「僕ってね、……どうしてだか、誰からも愛されるんだよ」には、戦争を生き延びた彼の深い孤独が滲み出る。

能の『弱法師』を大胆に翻案した本作は、『近代能楽集』に収録されている。空襲の猛火こそが原風景だと語り、戦災孤児として孤独に生きた青年・俊徳が、親世代への不信感を露わにする姿には、戦中～戦後を見つめる三島の鋭い視線がうかがえる。

安部公房『巨人伝説』

【出展資料】作：安部公房、演出：千田是也『巨人伝説』俳優座公演ポスター（1960年）

安部自身が1957年に発表した短編小説『夢の兵士』をもとにした作品で、終戦から15年が経った東北の田舎村を舞台としている。女主人が切り盛りする（文字通り）カビの生えた食堂を中心に、戦後の現在と戦時中の過去とを往還しながら物語が進む。食堂へやってきた大貫というみすばらしい姿の老人は戦時中、この村で巡査をつとめており、女主人とも家庭を持つ約束をしていた。しかし陸軍兵士だった自身の息子が脱走してきたため、その責任をとって村を追われていたのだった。村へ戻ってきた大貫は、ふたたび女主人と一緒にしようとするが、それには彼女

の息子、傷痍軍人である盲目で片足の息子・敬一が邪魔だった。敬一は大貫と彼の企みを嫌い、決闘に誘うが崖から落ちて死に、大貫だけが生き残る。彼らの背後では、公職追放を解除された元村長が、自らが戦時中に起こした「事件」に対する責任を認めることなく村長選挙へ出馬しており、「戦後」における大衆の無邪気な記憶喪失を批判的に描いている。

安部公房『幽霊はここにいる』

【出展資料】作：安部公房、演出：千田是也『幽霊はここにいる』俳優座公演ポスター（1970年）

「戦死した親友の幽霊」が見えるという深川啓介と、金儲けに目のない大庭三吉の出会いから物語は始まる。利害一致する二人は結託して「幽霊の身元探し」という名目で事業を立ち上げる。幽霊が深川以外に見ることができないのをいいことに、大庭は自らの都合のよいように幽霊を利用し、事業を拡大していく。しかし幽霊を利用してははずの人々は、やがて幽霊に利用される側へと変化し、新聞社や市長をも巻き込む大騒動を巻き起こす。最終的に深川の「戦死した親友」=本物の深川啓介が現れたことによって、深川を名乗っていたこの男に取り憑いていた幽霊は消え去った。だが、不可視の幽霊の旨味を知ってしまった人々はもはやそれを手放すことなどできず、大庭自身の「幽霊さんが見えるぞ」という台詞で幕となる。物語の寓話的性質に加え劇中で随所に歌が挿入されるなど、プレヒト的色合いの強い作品。

宮本研『反応工程』

【出展資料】作：宮本研、演出：兼八善兼・塩田殖『反応工程』劇団青俳公演ポスター（1959年）

作：宮本研、演出：藤本栄治・大岡欽治『反応工程』劇団潮流公演写真（1980年）

1945年8月九州のとある工場が舞台。かつての染料の製造工場は、現在ではロケット砲の推進薬を作り出すための「反応工程」の現場となっていた。ベテランの工場労働者たちに混じって学徒動員された田宮や影山、林たちは働いていた。ある日、影山に召集令状が送られてくるが、直後に影山は行方をくらませてしまう。現場の工員たちが戦時下の日々を生きる一方で、工場上層部は終戦の気配を見越して、もとの染料製造機械を再稼働させようとする。それに対して田宮は激昂し、「なぜごそこそ蔭で戦争に負けた準備なんかやってるんだ！」と叫ぶ。工場に戻ってきた影山は憲兵隊に連行される途中で自殺し、林も機銃掃射で死ぬ。敗戦へ向かう現実と、いまだそれを認められぬ建前との狭間で学生たちは死んでいった。田宮にも召集令状がやってくるが、間もなく終戦を迎える。物語は終戦から1年が経過し、従業員組合結成大会が行われようとしている工場にやってきた田宮と工員たちとの対話で締めくくられる。

秋元松代『常陸坊海尊』

【出展資料】 作：秋元松代、演出：高山図南雄『常陸坊海尊』 演劇座公演ポスター 宣伝美術：灘本唯人
(1967年)

別役実自筆原稿 秋元松代『常陸坊海尊』についてのエッセイ

敗戦直前の東北の寒村から物語は始まる。東京からの疎開児童である豊と啓太は山の中で美しい娘・雪乃と出会い、辛いときには「海尊さま」と助けを呼ぶように、と教えられる。雪乃は、かつて常陸坊海尊の妻だったと自称するおばばと一緒に住んでおり、空襲で死んだ「母」を演じるおばばのイタコ芸と雪乃に魅了された啓太は、彼女らとともに終戦直後に行方をくらましてしまう。一方、終戦から16年を経て東京で会社員となった豊は、東北のとある神社に啓太がいることを知って訪ねに行くが、そこで啓太は魔性を備えた雪乃に下男として使役されていた。雪乃からの扱いに悩み苦しむ啓太の前に、海尊を名乗る初老の男が現れ、彼の教えによって啓太自身もまた、自らの罪を物語る海尊のひとりとなって放浪の旅へ出る。

作者自身が自らの劇作家としての在り方に変化をもたらしたと語る、秋元戯曲の代表作。

第2章 原爆の表象、あるいは表象不可能性

田中千禾夫『マリアの首——幻に長崎を想う曲』

【出展資料】作・演出：田中千禾夫『マリアの首——幻に長崎を想う曲』俳優座公演ポスター・同公演写真（1973年）

別役実自筆原稿 田中千禾夫『マリアの首』についてのエッセイ

作者の故郷である長崎を舞台とし、原爆投下によって崩壊した浦上天主堂に実在する「ケロイドのマリア（被曝マリア）」を題材とした作品。白鞘の短刀を差し、自作の詩を売りながら夜の宿の見張りに立っている忍と、ケロイドを隠して看護婦として働きながら夜は娼婦となる鹿。ケロイドのマリア像の残骸を少しずつ盗み出そうとするこの二人に対して、鹿を原爆反対デモに利用しようとする矢張り、10年以上前に忍を犯し、いまは歓楽街を支配するヤクザのボスとなった次五郎など個性的な登場人物による詩的かつ抽象的、非現実的で幻想的な美しさを湛えた対話と語りによって劇は展開していく。物語は最後、雪の降る晩にマリアの首を盗み出そうとする鹿たちを、突如として喋りはじめたマリアの首自身が優しく励ますところで幕となる。

現実と幻想、戦争と平和、日常と非日常をめぐる思索が、長崎弁の美しさを基調とする登場人物それぞれの対話から浮かび上がってくる。1959年第6回岸田演劇賞（新潮社）受賞作品。

別役実『象』

【出展資料】別役実『象』自筆原稿（初演：1962年）

作：別役実、演出：鈴木忠志『象』早稲田小劇場公演ポスター（1968年）

病院で暮らす原爆症患者の男を、甥が訪ねてくる。男は、いつか元気を取り戻し、背中一面に広がったケロイドを群衆に見せて拍手喝采を浴びることを夢見ている。一方、甥は目立つことを避け、静かに目立たずに生きることを望んでいた。病室には妻や看護師、医師が訪れる。やがて甥も同じ病に冒され、男の隣のベッドへ入院することとなる。二人の心のすれ違いを通して、原爆が後世に残した身体的・精神的な傷跡を生々しく描き出す。

1962年、新劇団自由舞台の旗揚げ公演として初演された本作は、別役実の代表作であり、以降たびたび上演されてきた。原爆症患者の陥る閉塞的な状況を描きながらも、その根底には、人間が抱える孤独、疎外感といった普遍的なテーマが浮かび上がってくる。

小山祐士『日本の幽霊』

【出展資料】河盛成夫衣裳デザイン画 作：小山祐士、演出：千田是也・阿部廣次『日本の幽霊』第二次訪中新劇団公演（1965年）

第二次世界大戦中に陸軍が秘密裏に毒ガスを製造していたという瀬戸内海の久野島を、戦後、作家自身が訪れた際に受けた衝撃から生まれた作品。島の旧家である須波家の人々に焦点を当て、戦中から戦後にいたる時間の流れの中で、毒ガス製造工場が島にもたらしたさまざまな傷跡と、その只中に生きる人々の姿を描き出す。平和な暮らしを送っていた小島に軍の工場が開設され、地元の人々はみなそこで働くことになる。毒ガスの製造過程にかかわる人々の体は次第に蝕まれていき、病に苦しめられる者や事故で死ぬ者も多くでてくる。戦後、その後遺症に苦しむ者たちへの救済運動も行われるが、そのなかには自殺者も出る。広島に投下された原爆をはじめとして、戦争が人々に残した癒えない傷跡を一貫して取り上げてきた作者の静かな怒りが滲む作品。

宮本研『ザ・パイロット』

【出展資料】作：宮本研、演出：増見利清『ザ・パイロット 喜怒哀楽の四つの段よりなる抒情の劇』俳優座公演ポスター・河盛成夫衣裳デザイン画（1965年）

作：宮本研、演出：五十嵐康治『ザ・パイロット』劇団青年座公演映像（1985年）

第二次世界大戦終結後、B29のパイロットだったクリストファ・リビングストンは戦後、広島と長崎の原爆投下に関わった罪の意識に苛まれていた。自らの行為を「有罪」として裁いてもらいたさに強盗を繰り返すが、クリスは「英雄」であるがゆえに判決はいつも無罪だった。戦後20年を機に長崎を訪れたクリスは、偽の原爆ガワラを土産として売る祝筆、自らが監視を怠ったせいで原爆が落とされたと自責の念にかられて心を病んだ祝六平太ら祝家の人々と出会う。

戦争と原爆のトラウマ的記憶に苦しめられる人々との対話を通じて、戦争という極限的な状況下において、いったい誰が誰に対して、いかなる行為の責任を持ちうるのか、という問いが浮かび上がってくる。物語は筆が死に、祝家に新たな命の予感をもたらされたところで、過去から未来への希望の転換が示唆されて幕となる。

小山祐士『泰山木の木の下で』

【出展資料】作：小山祐士、演出：宇野重吉『泰山木の木の下で』劇団民藝公演ポスター・同公演写真（1963年）

ラジオドラマ『神戸ハナという女の一生』をもとにした作品。瀬戸内海の小島で暮らす被爆したクリスチャン、泰山木のもとで暮らす老女ハナを主人公とする物語。クリスチャンながら裏で墮胎を生業としていた彼女のもとに、刑事がやってくる。彼は老婆の行為については理解を示しつつも、墮胎幫助の容疑で署に連行する。取り調べの過程で墮胎を望んだ者たちそれぞれが有する理由が浮かび上がってくる。妊娠・出産あるいは墮胎の選択を通して、原爆が生き残った被爆

者たちに対して残した傷跡がいかに深刻であるかが明らかになる。老婆を取り調べる刑事も被爆孤児であり、同じく被爆者の妻とのあいだに生まれた子は無脳症なのだった。刑事は原水爆禁止の運動に参加したことや、取り調べ中の暴力などがスキャンダルとなって警察を辞職し、最終的に家族と暮らすことを決意する。老女には墮胎幫助の罪で実刑が下るが、病院で看取られ亡くなる。

瀬戸内海の牧歌的風景とそこに残された戦争の傷跡を取り上げ続けた小山祐士の代表作のひとつで、劇団民藝のレパートリー作品として現在に至るまで上演を重ねている。

小山祐士『二人だけの舞踏会』

【出展資料】作：小山祐士、演出：小山祐士・阿部廣次『二人だけの舞踏会』俳優座公演ポスター（1956年）

作：小山祐士、演出：東野英治郎・阿部廣次『二人だけの舞踏会』俳優座公演写真（1984年）

東京は山の手にある元松村元帥邸には、戦後、家主の狩米一家のほか、3組の夫婦が暮らしているが、この家に入出入りする実業家井上の愛人嘉江も一室を借りることになる。家族を原爆で奪われ、南方から復員してきた作曲家三鼓は、戦争の記憶をトラウマとして内に抱えたまま、自らも被爆した若い妻まりにすがって退廃的な作曲生活を送っている。井上の画策で家は人手に渡ることになり、みな結局立ち退かなければならなくなったが、三鼓は自らの才能に絶望し、まりに心中を迫る。しかし拒まれ、別居を言い出されたあと、自分一人で青酸カリを飲んで自殺する。

戦後の時間の流れとそこに残る戦争の傷跡とを描いた秀作。

井上ひさし『父と暮らせば』

【出展資料】作：井上ひさし、演出：鶴山仁『父と暮らせば』こまつ座公演ポスター・同公演写真（1994年）

終戦から3年が経とうとする1948年7月の広島が舞台。図書館勤務の福吉美津江が急な雷に怯えながら家に駆け込むと、押し入れの中から国民服姿の父・竹蔵が登場し、美津江に座布団を投げて押し入れの下段に入れと促す場面から物語は始まる。実は、竹蔵は三年前の原爆投下で命を落としており、美津江が図書館に来る木下という青年に恋心を抱いてから、娘の前に姿を現すようになったのだった。親友や父が原爆で死んでしまったにも関わらず、自分一人だけが生き残ったことに対して美津江は罪悪感を抱き、それゆえに木下に対する恋心を封じていた。だが、父との対話を通じて、過去に囚われていた美津江の心は次第に解きほぐされていき、木下との将来を前向きに考えるようになっていく。

登場人物は二人だけで井上戯曲のなかでは最も短い部類の作品だが、被爆地広島の惨禍と再生を、そこに生きる人の姿に託して鮮やかに描いた。

つかこうへい『広島に原爆を落とす日』

【出展資料】作・演出：つかこうへい『広島に原爆を落とす日』つかこうへい事務所公演チラシ・記事（1979年）

海軍参謀本部の将校であるディープ山崎は、数々の軍事作戦を献策した天賦の才を持ちながらも、白系ロシアとの混血児であるというルーツのために南海の孤島へと追いやられる。山崎は数名の部下とともに、いずれ日本が勝利を取めた暁には敗戦国となったアメリカの子どもたちになにか食べさせるものが必要であるとして、納豆づくりに腐心する。やがて終戦が間近に迫った頃、山崎はテニアン島のアメリカ軍基地へと連行され、広島への原爆投下を行うよう命じられる。最愛の人たちの命と引き換えにして日本にデモクラシーを根付かせるべく、山崎は両親と恋人が待つ広島への原爆投下を実行する。

アイゼンハワー元大統領が語ったとされる「人類の歴史において、原爆投下した最初の国民がアメリカ人であるというのは耐えられない」という言葉に着想を得たと言われる。のちに小説化された際には基本的な設定は踏襲しつつ、主人公が李氏朝鮮の末裔犬子恨一郎へと改められた。

野田秀樹『パンドラの鐘』

【出展資料】堀尾幸男舞台美術模型 作・演出：野田秀樹『パンドラの鐘』NODA・MAP 第7回公演（1999年） 制作・所蔵：堀尾幸男
同公演ポスター デザイン：平田好 写真：加藤孝

物語は太平洋戦争開戦前夜の長崎と、古代の王国を行き来しながら展開する。長崎では、ピンカートン財団による古代遺跡の発掘作業が進められ、考古学者カナクギ教授の助手オズが謎の鐘を発見する。一方、古代の王国では、女王・ヒメ女が兄・狂王を幽閉し、王位を継ごうとしていた。ヒメ女に命を救われた葬儀屋・ミズヲは、異国の都市で巨大な鐘を掘り出し、ヒメ女のもとへ持ち帰る。しかし、その鐘には王国滅亡の秘密が隠されていた。

現代と古代が交錯する物語は、古代の出来事が「未来の予兆」として浮かび上がる構造をとっている。吊り下げられた巨大な鐘と、空から落ちる原子爆弾の姿を重ね合わせた堀尾幸男の壮大な舞台美術も見どころのひとつ。1999年の初演では、野田秀樹と蜷川幸雄の二人がそれぞれ演出したバージョンが、別々の劇場で同時上演された。

野田秀樹『オイル』

【出展資料】堀尾幸男舞台美術模型 作・演出：野田秀樹『オイル』NODA・MAP 第9回公演（2003年）
制作・所蔵：堀尾幸男
同公演チラシ 宣伝美術：平田好 ポスター画：野又獲

1945年の島根県。電話交換手の娘・富士は、死者や神々と電話で交信している。ある日、特攻隊から脱走した青年操縦士・ヤマトの飛行機が不時着し、彼はアメリカへ飛ぶための「オイル」を求める。やがて敗戦後、島根は日系アメリカ人の支配下に置かれ、人々は瞬く間にアメリカに染まっていく。しかし、富士はその変化を受け入れられず、時代を越えて漂流してきた出雲の古人たちに「復讐の心」を忘れないよう伝える。現代に戻り8月9日、富士は広島にいた弟から電話を受ける。弟の声は、電話の向こうでの原爆投下によって溶けて消える。残された富士の復讐の叫びが響き渡る。

本作は、「古事記」に記された「国譲り」を「国盗り」の物語として捉えなおし、戦後の日米関係をめぐる物語として生まれた。なぜ原爆を落とした国に復讐をすることはいけないのか、という問いが、原爆で弟を失くした富士の叫びを通じて伝わる。同じく原爆をテーマとした野田秀樹による戯曲『パンドラの鐘』の続編的な位置づけとされている。

第3章 「焼け跡世代」の演劇人と戦争の影

別役実『マッチ売りの少女』

【出展資料】作：別役実、演出：鈴木忠志『マッチ売りの少女』早稲田小劇場公演チラシ・同公演写真（1967年）

同年早稲田祭前夜祭公演チラシ

大晦日の夜、一組の善良そうな初老の夫婦のもとに、一人の少女が訪れる。三人は穏やかにお茶を飲み交わすが、少女は突然、自分こそが夫婦の実の娘であり、かつて「マッチ売り」をしていたと告発する。戦後の焼け跡で、少女はマッチを売りながら、その火が燃えている間だけスカートの中を覗かせる仕事をしていたという。少女は、自分にマッチを売らせたのは誰かと問い詰める。夫婦は少女の言葉を否定し続けるが、少女は存在しないはずの弟を家へ招き入れ、自らの過酷な過去を突きつける。

アンデルセンの童話を下敷きに、不条理劇の要素を色濃く取り入れた別役実の代表作。戦争の記憶を封じ、何事もなかったかのように日々を生きる戦争経験者の大人たちに対し、戦時中に子ども時代を過ごした世代の視点から、鋭い批判を突きつけた作品である。

唐十郎『少女仮面』

【出展資料】作：唐十郎、演出：鈴木忠志『少女仮面』（同時上演演目：鈴木忠志『劇的なものをめぐってI』）早稲田小劇場アトリエ公演ポスター・同公演写真（1969年）

宝塚の舞台に立つことを夢見る少女・貝は、『別冊フレンド』を手放さない老婆とともに、元宝塚スター・春日野八千代が営む喫茶「肉体」を訪れる。店内では、厳しい演技レッスンに耐えるボーイたち、マスターに冷たくあしらわれる腹話術師の客、水道を求めてさまよい歩く男が入れ替わり現れ、騒然としている。やがて貝はマスターの尋問に耐え抜き、風呂桶とともに現れた春日野八千代と対面する。レッスンを重ね、次第に彼女は春日野の相手役として認められるようになる。『嵐が丘』のヒースクリフとキャサリンを演じるうちに、春日野の記憶は遠い昔、慰問公演で訪れた吹雪の満州へと遡っていく。

水を求めて焼け跡を彷徨い歩く男と、春日野の満州での悪夢が交差する。戦後、浅草の混沌とした焼け跡を生き、それを自身の原風景として創作に投影した、唐十郎ならではの作品である。1969年、鈴木忠志の早稲田小劇場に書き下ろされ、翌70年、岸田戯曲賞を受賞。唐十郎独自の肉体論を体現する傑作でもある。

唐十郎『ベンガルの虎』

【出展資料】作・演出：唐十郎『ベンガルの虎 白骨街道魔伝』状況劇場公演写真（1973年）

作：唐十郎、演出：金守珍『ベンガルの虎』新宿梁山泊公演ポスター 宣伝美術：宇野亞喜良、福田真一（2021年）

東南アジアに留まり、戦死者の遺骨を拾っていた男・水島は、実は白骨を象牙の代用品として日本に送り、ハンコとして売りさばいていた。東京・下谷町に住む婚約者・カンナは、水島からの贈られたハンコを受け取りに訪れるが、かつての水島の上官や産婆のお市らに阻まれる。そこへ、カンナのかつての教え子である流しの銀次が現れ、彼女とともに行動する。道中、南方でラシャメン（西洋人の妾）として生きた母・マサノや、娼館を営んでいた村岡がカンナの夢に現れ、彼女は過去と現在、生と死の狭間で揺れ動いていく。

竹山道雄の小説『ビルマの豎琴』を下敷きに、1973年に不忍池水上音楽堂で初演され、バングラデシュでも上演された。戦後、現地に取り残された日本兵の白骨と、日本人娼婦たちの運命を描いた壮大な幻想劇。

鈴木忠志『トロイアの女』

【出展資料】原作：エウリピデス、潤色：大岡信、演出：鈴木忠志『トロイアの女』早稲田小劇場、岩波ホール公演プログラム・同公演写真（1974年）

トロイア戦争の終結後、敗れたトロイアの女たちは、勝者ギリシャの奴隷として連れ去られる運命に直面する。王妃ヘカベとその娘たちは、戦争によって城も家族も奪われ、異国で妾として生きることを強いられる。舞台には神像が静かに佇み、戦争の惨禍を無言で見つめ続ける。その姿は、神仏の沈黙と無力さを象徴すると同時に、人間の力では抗いがたい運命の重さをも示唆している。

エウリピデスのギリシャ悲劇をもとに、トロイアの陥落に日本の敗戦後の風景を重ね合わせる形で創作された本作。1974年の初演では、ヘカベを演じた白石加代子の鬼気迫る演技に加え、能の観世寿夫や新劇出身の市原悦子との共演も大きな注目を集めた。以後、世界20か国で上演され、戦争と女性の悲劇を問いかける作品として高く評価されている。

寺山修司『疫病流行記』

【出展資料】作・演出：寺山修司『疫病流行記』演劇実験室天井敷公演ポスター 宣伝美術：小竹信節（1976年）

同上演台本

東南アジアの名もなき町。「私はあなたの病気です」と告げる少女の訪れとともに、町では疫病が蔓延する。営業を続ける植民地キャバレー「商船パゴパゴ」の女主人・魔痢子は、この地に秘められた記憶を頑なに隠している。刑事は、その秘密を探るべく魔痢子に「30年前の陸軍野戦病院で起きたこと」を問いただす。一方、二人の青年・米男と麦男は疫病から逃れるため、南への脱出を企てる。町は疫病患者とともに崩壊していく。そして刑事は、戦時中この地で行われた恐るべき「細菌兵器」の実験について暴き出す。

1975年、寺山修司率いる演劇実験室◎天井桟敷によりアテネ・フランセ文化センターで初演。以降、ヨーロッパ各地を巡演し、1976年に再び日本にて上演された。天井桟敷の「実験三部作」の一つに数えられる。東南アジアにおける疫病流行と、細菌兵器実験の因果関係を巡る幻想譚である。

つかこうへい『戦争で死ねなかったお父さんのために』

【出展資料】作：つかこうへい、構成・演出：中島諒人『戦争で死ねなかったお父さんのために』鳥の劇場公演ポスター（2021年）

作：つかこうへい、演出：長崎紀昭『戦争で死ねなかったお父さんのために——明日からのレポート』文学座アトリエの会公演写真（1974年）

1971年劇団仮面舞台によって初演。『新劇』1972年4月号掲載。ごっこ遊びを交えつつ嬉々として戦争へのあこがれを口にする三人の姿を通して、戦後日本における第二次世界大戦の扱われ方が痛烈に皮肉られている。

太平洋戦争終戦から三十年後、岡本八太郎のもとに召集令状が届く。郵便配達人の不手際により召集令状を受け取ることができなかった岡本は「非国民」として後ろ指を指され、終戦後も外地からの復員兵たちが語る戦争体験の輪の中に入ることができないことに苦しんできた。警察署長の山崎、郵便局長の熊田は岡本の出征に備え、自分たちの戦争体験に基づいて戦地でのあり方を熱心に指導する。岡本の息子である寒太郎は今さら出征していく父に対して冷ややかであったが最後には父の意を酌み激励の言葉を告げる。やがて出征の時が訪れ、迎えに来た男の口から岡本がカンボジアや中近東の戦場へ送り込まれることが示唆される。

第4章 さまざまな視点から見た戦争

斎藤憐『グレイクリスマス』『上海バンスキング』

【出展資料】作：斎藤憐、演出：栗山民也『グレイクリスマス』本多劇場プロデュース公演チラシ 宣伝美術：宇野亜喜良（1983年）

作：斎藤憐、演出：串田和美『上海バンスキング』オンシアター自由劇場公演チラシ 宣伝美術：イエローバッグ（1981年）

『グレイクリスマス』は、華族の一家が、敗戦後のアメリカ軍進駐によって激変する日本社会と対峙する物語である。無能な伯爵、戦犯裁判に連行される弟、ヒロポン中毒の息子といった男たちに対し、家族を支えるのは社交界でダンサーとして働く妻たち。アメリカの要人と交流を深め、自由に恋をしながら生活を支える彼女たちの姿を通して、アメリカがもたらした「デモクラシー」の実像が浮かび上がる。天皇とは何か、憲法とは何か、そして日本にとっての「戦後」とは何だったのかが問い直される。

同じく斎藤憐の代表作『上海バンスキング』は、戦前・戦後の上海を舞台に、ジャズを愛する人々の哀歓を描いた音楽劇。トランペット奏者の夫を持つまどかは、ひょんなことから夫とともに上海のクラブ「セントルイス」で働くことになる。音楽が人種や国境を越えて人々をつなぐ一方、戦争はその音楽を容赦なく奪っていく。華やかさと悲しみが交錯する中で、濃密な人間ドラマが展開される。

マキノノゾミ『東京原子核クラブ』

【出展資料】作：マキノノゾミ、演出：宮田慶子『東京原子核クラブ』俳優座劇場プロデュース公演ポスター イラスト：伊波二郎 宣伝美術：ミネマツムツミ（2012年）

作・演出：マキノノゾミ『東京原子核クラブ』東京ときめきフェスタ実行委員会公演写真（1997年）

ノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎をモデルに描かれた、青春群像劇。昭和7年、東京・本郷の下宿屋「平和館」には、風変わりな住人たちが集っていた。理化学研究所に勤める若手物理学者・友田晋一郎は、優秀でありながら、周囲の高い水準に圧倒され、自信を失いかけていた。仲間たちに励まされながら研究に打ち込む友田だったが、やがて「平和館」にも戦争の影が忍び寄る。理研の研究は軍事利用の可能性を帯び、新型爆弾の開発へと接近していく。

ギャンブル好きのピアニスト、謎めいた女性、激情型の劇作家、学生でもないのに東大戦に出場する野球好きなど、下宿の面々の青春模様が物語を彩る。物理学者の純粋な探究心が、いつしか原子力爆弾への関心へとすり替わっていく過程を描きながら、科学と戦争の接点を浮かび上がらせる。1997年、読売文学賞 戯曲・シナリオ賞を受賞した。

野田秀樹『エッグ』

【出展資料】堀尾幸男舞台美術模型 作・演出：野田秀樹『エッグ』NODA・MAP 第17回公演（2012年）
制作・所蔵：堀尾幸男
同公演チラシ 宣伝アートワーク：森本千絵（goen°）

ある芸術監督が、寺山修司の未完の脚本『エッグ』を手に入れる。それは、架空のスポーツ「エッグ」をめぐる選手たちの葛藤と、人気歌手・莓イチエの軌跡を描いた物語だった。選手たちは、エッグの殻を割らずにガラス管を差し込み、白身と黄身を吸い出すという独自の技術を磨き上げ、オリンピックへの出場権を獲得する。だが次第に、「エッグ」がただの競技ではなく、戦時下の満州で行われた細菌兵器開発と、生体実験の暗喩であることが明らかになる。

20世紀を象徴する文化であるスポーツと音楽に宿る熱狂に着目しつつ、国家が個人の身体に加えて来た暴力の歴史に鋭く切り込んでいく。音楽に椎名林檎を迎え、2015年にはパリ（国立シヤイヨー劇場）を含む4都市で再演された。

野田秀樹『逆鱗』

【出展資料】堀尾幸男舞台美術模型 作・演出：野田秀樹『逆鱗』NODA・MAP 第20回公演（2016年）
制作・所蔵：堀尾幸男
同公演チラシ アートディレクション：佐野研二郎（MR_DESIGN） デザイン：田村有斗（MR_DESIGN）

ある水族館では、イルカショーに代わる新たな企画として「人魚ショー」の開催を目指し、人魚の公募を始めていた。選考に落ちた NINGYO は、電報配達員の青年モガリと出会う。やがてモガリは水族館の潜水作業員「潜水鵜」となり、人魚探しに加わる。一方、人魚学者の柿本魚麻呂と助手ザコは、NINGYO の首に逆さの鱗を見つけ、「本物の人魚」として世に売り出そうと目論む。しかし、NINGYO が語り始める真実の物語は、幻想的な水族館の風景から一転し、戦時中に実在した恐るべき計画へと遡及していく。

本作の題材は、人間魚雷「回天」。NINGYO(人魚)は人間魚雷の略称であり、海底で兵士たちの死を見届け続けた存在として描かれる。野田秀樹は、過去作『オイル』で引き返った特攻兵士の姿を描いたが、本作『逆鱗』では、引き戻すことすら許されなかった、戦時下の非人間的兵器と、その不条理に鋭く迫っている。

古川健『追憶のアリラン』

【出展資料】作：古川健、演出：日澤雄介『追憶のアリラン』劇団チョコレートケーキ公演ポスター 宣伝美術：R-design（2015年）

戦中・戦後の朝鮮総督府平壤地方法院検事局を舞台に、大日本帝国による統治下で生きる日本人検事・豊川千造の姿を描く。横暴な支配を行う一部の日本人官吏たちの中で、三席検事として着任した豊川は、数々の困難に直面しながらも、自らの信じる正義と良心に従い、誠実に職務を果たそうとする。だが敗戦を迎え、日本人検事たちは人民裁判にかけられ、豊川も命の危険に晒される。家族を先に逃がした豊川は、自身は生きて日本に帰れないことを覚悟するが、彼の誠実な生き様に心を動かされた朝鮮人事務官・朴忠男が、豊川の無実を証明すべく立ち上がる。

日本による朝鮮統治の功罪を見つめつつ、本作は豊川という一人の男を通して、「人間が持つべきヒューマニズムの根底」（渡辺保「解説」『古川健 1：「治天ノ君」「追憶のアリラン』』ハヤカワ演劇文庫、2019年）を問う。朝鮮と日本、二つの視点を織り交ぜながら、歴史の転換点における人間の選択と葛藤を鮮やかに浮かび上がらせた作品である。

古川健『帰還不能点』

【出展資料】作：古川健、演出：日澤雄介『帰還不能点』劇団チョコレートケーキ公演ポスター 宣伝美術：R-design（2021年）

昭和16年の東京・総力戦研究所。各界から選抜された優秀な若手たちが研究生として集い、模擬内閣を組織して日米開戦のシミュレーションを行っていた。会議の結論は「日本の敗戦」だったが、同年、現実では太平洋戦争が開戦する。そして終戦から5年後、模擬内閣で日銀総裁役を務めた仲間の訃報を機に、彼の妻が営む飲み屋にかつての仲間たちが集う。彼らはそれぞれ近衛文麿、平沼騏一郎、松岡洋右らを演じながら、日本が戦争へと突き進んだ過程を検証していく。それは「日本はいつ、どこで引き返せなくなったのか」を探る、失敗の再現だった。

タイトルの「帰還不能点」とは、飛行機が離陸後、燃料の制約により空港へ戻れなくなる地点、したがって、後戻りできる最後のチャンスのことを指す。本作は劇中劇の形式をとりながら、日本の「帰還不能点」を探し、戦争は一人の人物によってではなく、複合的な原因のもとに導かれたことを明らかにしていく。

古川健『無畏』『遺産』

【出展資料】作：古川健、演出：日澤雄介『遺産』劇団チョコレートケーキ公演チラシ 宣伝美術：R-design（2018年）

作：古川健、演出：日澤雄介『無畏』劇団チョコレートケーキ公演ポスター 宣伝美術：R-design（2020年）

『無為』では陸軍大将・松井岩根に焦点を当てる。松井は、日中友好を誰よりも願っていた人物でありながら、戦後には南京事件の責任を問われ、戦犯として死刑判決を受けた。本作は、彼

の弁護士・上室との対話や、松井自身の回想録を軸に、その生涯をたどりながら「なぜ南京事件は起きたのか」という問いに迫る。国家と個人、信念と責任の狭間で揺れる姿を通して、歴史の深層を照らし出す作品である。

一方、『遺産』は、関東軍防疫給水部、いわゆる「731部隊」を題材とした作品である。老医師の記憶を語りの軸とし、1990年と1945年の二つの時間軸が交錯しながら物語が進行する。人体実験という非道な行為を描きながら、日本が抱える負の「遺産」とどう向き合うべきか、あるいはそれが可能なのかを静かに問いかける。歴史の忘却と記憶の継承のはざままで揺れる、重厚なドラマである。

坂手洋二『サイパンの約束』

【出展資料】作・演出：坂手洋二『サイパンの約束』燐光群公演ポスター 宣伝意匠：高崎勝也（2018年）同公演映像

とある映画制作会社が、サイパン島のホテルで自主映画『サイパンの約束』の撮影を行おうとしている。物語は、かつてサイパンで戦争を経験した女性・晴恵の記憶を映像化するというものであった。しかし、晴恵はすでに認知症を患っており、過去の記憶を曖昧になっていた。そこで、晴恵の父や弟、友人などの役を演じるキャストが集められ、ワークショップ形式で彼女の記憶をたどっていく。それは子ども時代の穏やかな記憶から、戦争の勃発とともに暗転し、悲劇の記憶へと変貌していく。

本作は、現代と過去が交差する劇中劇の形式をとっている。晴恵は、実際にサイパンで暮らした坂手洋二の義母をモデルに描かれた。サイパン島は、第一次世界大戦後に日本が統治し、多くの日本人が移住した場所である。太平洋戦争では激戦地となり、多くの島民が命を落とした。本作は、その歴史に向き合いながら、一人の女性の記憶を通じて、戦争の影を演劇的に描き出す。

藤田貴大『equal』

【出展資料】作・演出：藤田貴大『equal』マームとジブシー公演ポスター 宣伝美術：名久井直子（2024年）提供：マームとジブシー

あゆみ、じつこ、しんたろう、はさたにという4人の人物が、かつて「あやちゃん」と交わした会話を想起する。それぞれの他愛ない会話は、やがて世界のどこかにいる誰かの苦しみや、喪失についての語りになる。4人が「あやちゃん」の伝えようとしていたことに思いをめぐらすうち、物語は小さな隣町、北海道伊達市で1945年に21人の犠牲者を出した空襲の記憶へと行き着く。

マームとジブシーの2年振りの新作として同作が上演された2024年2月は、折しもイスラエ

ル軍によるガザでの空爆が激化し、幼い子どもたちが無残に殺され、爆撃によって大勢の市民が命を、また身体の一部を失う様子が日々ニュースや SNS を通して伝えられた時期だった。同作で、この世界のどこかで人びとが感じている／過去に感じた痛みを自分ごととして感受してしまう「あやちゃん」という人物の姿は、ガザやウクライナの惨状に対して同時代人が抱く痛みの感覚に、日本の演劇界でいち早く呼応した例のひとつである。

第5章 沖縄と終わらない戦争

知念正真『人類館』

【出展資料】作：知念正真、演出：幸喜良秀『人類館』演劇集団「創造」公演プログラム・同公演写真（1978年）

作：知念正真、演出：幸喜良秀『人類館』演劇集団「創造」、早稲田大学公演チラシ（2008年）

1903年、大阪で開催された内国勸業博覧会での「人類館事件」を題材とした作品。博覧会では、朝鮮、アイヌ、ジャワ、トルコ、アフリカ、沖縄などの人々が見世物として展示され、後に各地から抗議が寄せられ、大きな問題となった。

本作には「陳列された男女」と「調教師のような男」が登場し、「見せる／見せられる」という関係を軸に展開する。沖縄戦やベトナム戦争、復帰運動など、多層的な問題を包括しながら、物語の終盤では「振り出しに戻る」構造をとり、歴史が繰り返されることを示唆している。1976年に初演され、1978年に岸田國士戯曲賞を受賞。沖縄演劇としては初の受賞であった。

詩森ろば『キムンウタリ OKINAWA1945』

【出展資料】作・演出：詩森ろば『キムンウタリ OKINAWA1945』流山児★事務所公演映像（2023年）

キムンウタリとは、アイヌ語で「山の同胞」を意味する。沖縄戦で命を落としたアイヌ兵士たちと沖縄の人々を慰霊するため、糸満市に建立された「南北之塔」には、この言葉が刻まれている。しかし、本土から迫害を受けた二つの民族が共に戦った歴史は、次第に忘れ去られつつある。

本作は、1903年に起きた「人類館事件」を題材とした知念正真の戯曲『人類館』へのオマージュとして創作された音楽劇である。沖縄戦の惨劇と、人類館のショーケースという二つの空間を行き来しながら進行し、戦時下におけるアイヌと沖縄の人々の運命を描き出す。過去と現在を交差させながら、今なお根強く残る民族間差別の問題に鋭く切り込む。アイヌの迫害の歴史を描いた『コタン虐殺』（2020）に続き、詩森ろばが流山児★事務所のために書き下ろした。

詩森ろば『OKINAWA1972』

【出展資料】作・演出：詩森ろば『OKINAWA1972』流山児★事務所公演チラシ 宣伝美術：詩森ろば（風琴工房）（2016年）

沖縄返還が行われる1972年、その激動の時代に渦巻く沖縄裏社会の抗争を描く。戦後、米軍基地の設置によって沖縄の風景は一変し、裏社会の勢力が台頭。「コザ派」と「那覇派」が覇権を争う中、フィリピン人の父と沖縄人の母を持つ亨は、那覇派に足を踏み入れる。一方、時の首

相・佐藤栄作と国際政治学者・和泉敬は、沖縄返還交渉の裏でアメリカが突きつけた難題に直面していた。それは、有事の際の日本への核持ち込みを容認する密約だった。

2016年に初演された本作を改訂し、再演。『キムンウタリ OKINAWA1945』と同時上演された。沖縄戦で多大な犠牲を強いられた沖縄が、本土復帰を前にしてなお大きく揺れ動く。1972年の動乱と、その後も続く沖縄の現実を鋭く見つめる意欲作。

安和学治・国吉誠一郎『9人の迷える沖縄人～after'72～』

【出展資料】脚本：安和学治・国吉誠一郎、演出：当山彰一『9人の迷える沖縄人～after'72～』劇艶おとな団プロデュース公演映像（2022年）

舞台上の大きな会議用テーブルを、年齢も服装も口調もてんでばらばらの9人の人物が囲んで着席する。彼らは、1972年5月15日の本土復帰を前に意見交換会をするという名目で新聞社に集められた人びと——の役を演じる役者たち、という筋書きである。彼らが演じている1972年の討論と、稽古の休憩時間に役者自身として語る沖縄に対する思いとの境目は、はじめは明確にわかるものの、議論がエスカレートしていくにつれ次第にわからなくなっていく。彼らの中には、沖縄戦で子どもを亡くした世代もいれば、1972年の沖縄で繰り広げられた本土復帰をめぐる論争をよく知らない世代もいる。

劇中劇における復帰論者と独立論者の対立に、劇の外にいる役者のとる立場が重なり合い、一筋縄ではいかない沖縄の人びとの置かれた状況とそこで湧き起こる思いが浮き彫りになる。沖縄出身または在住の俳優たちの熱のこもった演技によって、劇中劇と劇が重なるばかりでなく、彼らの言葉は現実における沖縄の人びとの切実な本音としてさえ響いてくる。

藤田貴大『cocoon』

【出展資料】原作：今日マチ子、作・演出：藤田貴大、音楽：原田郁子『cocoon』マームとジプシー公演ポスター 宣伝美術：川名潤 宣伝イラスト：今日マチ子（2022年） 提供：マームとジプシー

今日マチ子による同名の漫画を原作に、沖縄戦に動員される少女たちの物語を舞台化した作品。原田郁子による音楽を伴う。2013年の初演時には大きな反響を呼び、2015年と2022年の再演では大幅に改訂された。少女たちが序盤の学校生活で生き生きと発した言葉は、ガマの中で負傷兵を看護するときや、砲撃から走り逃れるときに反復され、意味を増幅させていく。

初演版では、冒頭と終盤シーンでの少女サンの語りから、2013年にいるはずの彼女が夢の中で戦時下を生きていることが読み取れる。他愛ないお喋りをする少女たちが砲弾の嵐の中を海に向かって走り続けなければならなくなる物語は、少女たちが普遍的に体験しうる、しかし同時に個別具体的な痛みを伴うものとして印象づけられる。冒頭と終盤のサンの語りは、2022年版

では客席に座る人びとへの問いかけとしてリライトされた。彼女が客席を見据えて「現在(いま)は、過去から見た未来。あのころ、だれがこんな未来、想像しただろう」と言うとき、2022年以降の私たちは現在の戦争のことを思わずにはいられない。

藤田貴大『Light house』

【出展資料】作・演出：藤田貴大『Light house』 マームとジブシー公演ポスター 宣伝美術：川名潤 宣伝写真：岡本尚文（2022年）

『cocoon』をきっかけに沖縄でのリサーチを重ねた藤田貴大が、那覇文化芸術劇場 なは一とのこけら落としシリーズとして手掛けた作品。タイトルの「Light house=灯台」には、コロナ禍でも光を灯して人びとを待ち続ける場所としての劇場と、同作のラストで海へ漕ぎ出でたいっぺいが目にする、未来の象徴としての灯台が重ね合わされている。

沖縄の水問題に着想を得た同作は、現代の沖縄で日常的に営まれる生を前景化しているが、水というモチーフは海を介して沖縄戦の記憶とも結びつく。水が過去から現在を通過して未来へと流れるように、日常においても、より巨視的な人類の歴史においても、たとえ「だれかが死んでも」「終わること」などないというメッセージが他愛ない会話劇によって伝えられる。演劇において現在の日常／生を描くことと過去の惨劇／死を語ることは両立しうる。なぜならその両者は現実においても地続きであるはずだからだ。同作はそのような境地を切り拓いた。

兼島拓也『ライカムで待っとく』

【出展資料】作：兼島拓也、演出：田中麻衣子 KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース『ライカムで待っとく』公演ポスター 宣伝イラスト：岡田みそ 宣伝美術：吉岡秀典（2022年）

主人公である雑誌記者の浅野は、ひよんなきっかけから1964年に普天間で起きた沖縄青年らによる米兵殺傷事件について調査することになる。舞台上では、1964年と浅野たちが生きる現在、そして沖縄の様々な歴史的時点が交差していく。

同作は、実際に起きた事件の裁判過程を綴った伊佐千尋のノンフィクション作品『逆転』をベースに、沖縄在住の劇作家兼島拓也と、沖縄にルーツをもつ演出家の田中麻衣子が沖縄と神奈川でのリサーチを重ねて創り上げた。創作の拠点となった沖縄と神奈川という二つの土地の対比が、米軍基地に対する住民の姿勢の違い、航空機の音と汽笛の音といったかたちで作中に取り入れられる。キャストの半数を占める沖縄出身の俳優による生き生きとしたウチナーグチでの語り、謎が謎を呼ぶ展開、そして重みのあるテーマに反してコメディ要素も多分にもつ会話劇の妙によって、観客は一気に作品世界へと引き込まれ、驚くべき結末へと誘われる。第30回読売演劇大賞優秀作品賞を受賞するなど高く評価された。

三好十郎作品解説

後藤隆基（立教大学大衆文化研究センター特定課題研究員）

つかこうへい作品解説

藤崎景（明治大学大学院文学研究科博士後期課程）

その他の作品解説

矢内有紗（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）

主な担当箇所：別役実、唐十郎、野田秀樹作品ほか

関根遼（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程）

主な担当箇所：安部公房、宮本研、小山祐士作品ほか

近藤つぐみ（早稲田大学演劇博物館助手）

主な担当箇所：藤田貴大作品ほか